

新 刊
紹 介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be though expert in both.

児玉実用著

随筆集『黒つぐみ』

(RAVINE社、A6判
六十二頁、三〇〇円)

『黒つぐみ』は児玉教授の随筆集である。小冊子ではあるが、心豊かな著作である。ここに収められた文章は次から次へとページをめくらし、たちまちにして巻を終るのである。そのように一気に読めるのである。どの文章も短かいものであるが、人像を描いて珠玉の文字。人像の素描は特殊な香氣をもってミリュウを作っている。易々と書かれているが易々と書ける文章

ではない。

著者は英文学者であり詩人である。

詩集に『イギリスの旅』『エジプトの笛』『カンパニー』などがあるが、いずれも異郷の旅情を歌ったものである。

『黒つぐみ』の随筆は、これらの詩を散文で歩いている。

詩では風景や街角店頭を中心にして人物が点景的に歌われている。『黒つぐみ』の散文は人物を中心にして風景や街頭がバックの役目をしている。同じ旅からの取材である。

詩は人によって心に届きにくいものもある。散文はだれの心にも這入って行く。それだけに心に止まる文章というものは成し難い。

『黒つぐみ』の一文一文は著者の匂いを漂わせて読者の心をとらえて行く。描くところの人物は異郷の旅のゆきずりに交歓談笑した人人である。老若男女の庶民が多い。

冒頭の一文には揚(ヤン)という中国人の青年ガイドが出てくる。「どこにポイントがあるかわからない茫漠さ」などとその

青年を描いているが、その男との対話も面白い。

カイロのホテルで現われるボーイが握手を求めに来る。「その手がまた巨大で油じみて野球のグラブを思い出したかと思うとそれはチップの請求であった。」といった書きぶりである。私にもそういう経験があるのでカイロの旅が甦ってきた。

著者は、帰国後、これら旅のゆきずりに逢った異国の人人から便りを貰ったりしている。時に笈底にそれを求めて旅情を回想するのである。

オスロで逢った少女の追憶に「いつ暮れるとも知れない果てしない昼の中で、長い長い手紙を読んでいる気持で、私もそばに立ちつくしていた。」というところがある。心に伝わる文字である。

この随筆のすべては、前記のように、異郷の旅で逢った人物とのわずかな時の交遊記であるが、それは読者への外国土産のようにも書かれている思いがする。

著者は「あとがき」で「私の心のアパートは、狭いのが迷惑ながら、いろんな人たちに住んで貰っている。ここ(次頁へ)